

昭和三十九年三月

秋田県文化財調査報告書第三集

羽後町足田塙跡発掘調査概報

秋田県教育委員会

発掘調査の跡は、埋め戻しによつてもとの耕地・山野となり、後日現地を訪れる方に、調査によつて判明した遺構をお見せすることが出来ず、窑内君も適切な解説を差し得ませんので、視察される方の方の資料にて、この調査報告書を隠写したのですが、写真はもとより図版の大部も残しかねました。これだけ口述記録と残したのも素人わざの甚だ不出来なもので恐縮に存じます。

昭和四十二年十月

茨城県文化財保護協会羽後町立部 柳崎隆興

羽後町新坂地区の田所在の遺跡の発掘は、昭和三十八年度国の緊急発掘調査の対象となり国庫補助をうけて実施したのである。なお、これにさきうち昭和三十六年、三十七年に亘りても県教育委員会、羽後町教育委員会が主体であり、その遺跡の重要性から調査を行なつてゐる。この三年次にわたる調査の概要を明かにするため報告書を刊行し、今後の研究の手がかりとしたい。

埋蔵文化財包藏地の破壊は、公共事業や土木工事の活発化に伴ない最近各地で問題となつてゐるがゆゑ、このように、県内でも古くから重要な遺跡として注目されていた足田遺跡が、発掘調査によって記録に残されることは、歴史説明の裏証資料としてまことに意義の深いことである。

研究者の貴重な資料として活用をお願いする次第である。

昭和三十九年三月十日

秋田県教育厅社会教育部長

石川哲三

一、調査要項

二、遺跡の発見及び発掘調査にいたるまでの経過

三、位置及び地形（図版第一図参照）

四、発掘調査

昭和三十一年夏調査（イ、南田地区、ロ、城神廻り地区）

昭和三十七年度調査（ハ、ひばり野遺跡、ニ、城神廻り遺跡）

昭和三十八年度調査（ホ、ひばり野遺跡）

五、結び

六、図版（第二図—第十四図）（「昭和五六年度玉藻考古」）

七、あとがき

二、調査要項

昭和三十六年度発掘調査

羽後町・南田・足田・城神通り遺跡

一、目的 明治末年、（是年金庫）深沢多市氏が発見した黒書土器の存在並びに遺跡を確認するためには、
二、発掘調査の主体 秋田県教育委員会、羽後町教育委員会。

三、調査期日 昭和三十六年十一月九日から十五日まで七日間。

四、発掘調査員 秋田県文化財専門委員 常良修介

五、登壇調査補助員 鳥立鷹雄、森川高校教諭

六、登壇調査測量員 横手市立大沢小学校教諭 豊島豊

七、その他 地元有志 佐藤洋一

八、登壇調査測量員 県立金足高等学校教諭 須田繁

九、登壇調査測量員 県立高松高等学校教諭 木崎和広

昭和三十七年度発掘調査 羽後町・足田・城神通り・足田雲省野遺跡

一、目的 前年度調査の周辺段丘上に墓葬地の存在を推定し、それを確認するためには、
二、発掘調査の主体 秋田県教育委員会 調査を実施した。

三、調査期日 昭和三十七年五月一日から七日までの七日間

四、発掘調査員 秋田県文化財専門委員 常良修介

五、登壇調査補助員 県立米内沢高校教諭 石勝城跡頭彰会

六、登壇調査測量員 県立米内沢高校教諭 木崎和広

七、その他 地元有志並びに新成中学校生徒二百名 貢貢

昭和三十八年度発掘調査

羽後町足田所在遺跡

一 目 的

足田所在遺跡は、過去二〇年におたり調査が行なわれたが、當該遺跡から重要性を遺物として実施するものである。

二 発掘調査の主体

三 発掘調査期間
七月二十三日から八月十日までの十九日間。

四 発掘調査員

イ 略歴調査顧問 東京大学教授兼文化財調査官 文部博士

秋田県教育委員会 教育長

羽後町教育委員会 教育長

口 発掘調査員

羽後町教育委員会 教育長

羽後町教育委員会 教育長

秋田県文化財専門委員

岩手大学教授 文部博士

湯沢北高技術土木科

十四名
十五名

口測量生徒

ハ、発揚人夫

二、発揚事務局

金足農業高技土木科

同上

県教育方社会教育課長

県教育委員会幹事長

県教育委員会文化係長

一、遺跡の發見及び発掘調査にいたるまでの経過

明治末年時の秋田県史論纂主任であつた長井金風氏は県史論纂途上、古文献にみられる雄勝城について、その資料を求めていたところ、雄勝、平鹿地方に數ヶ所の口碑による雄勝城跡を知ることが出来た。氏はこの中から特に小字を中心とした地名からの解明につとめた結果、當時の新成村土館地区をせに佔もうれていた「雄勝城」跡と推定している。更に氏は城跡の実証資料を得るために大正寺間村役場を訪り、村内を踏査した結果、押社城神山神社で雄勝城内の磐神と考えて、裏手の湿地帯の發掘を試みていく。その結果、数の土器を発見して、その同地を雄勝城とす。考そは一層強められた。渾沢多市氏も雄勝城の究明(ひつ)とめ、地形、地名などから長井氏と同様に、土館先邑を雄勝城の存在として、氏の著書「雄勝城跡考」の中でのべ、長井氏の説に賛意をあらわしている。また大山貞造氏も雄勝城に関する説を比較して、今のところ確証はないけれども、他の推定地よりはむしろ土館地区

が雄勝城跡ではなかろうかとのべてい。このように郷土史研究家の熱意によつて、数ヶ所の推定雄勝城跡の中でも最も有力視されるよくなつた。この努力が戦争によつてやむなく中断されたいたが、さる三十四年度からはじめられた秋田城跡の発掘調査を契機として、県内各地に郷土の文化財の保護や調査団体が組織されていった。羽後町でも教育委員会を中心となつて郷土の文化財の調査がはじめられ、光洋・長井金風氏筆揮の土器の一部が同町新成小学校に保存されていることが柿崎隆興氏の努力によつて判明した。調査の結果、多數の墨書き土器で、この土器については後述する、この柿崎氏の調査が再びきっかけとなり、雄勝城はともかくも秋田城遺跡以降の開拓地域に關する相当遺跡と推定し、県教育委員会及び羽後町教育委員会が中心となつて、昭和三十一年秋、三十七年春、更に昭和三十八年夏と三次にわかつて調査を実施した。

三、位置及び地形（図版第一図参照）

本県の南部に広大な穀倉地帯をつくつた雄物川の中流、冲積地は南北を軸とする紡錘状の横手盆地を形成している。今回調査を行つた雄勝郡羽後町は、その南端西側下流にて、酒都湯沢市から羽後電鉄西馬音内線で西馬音内駅に下車する。こより北に約四キロの地点に調査予定地の所在する土館部落がある。これは旧新改村の中心であつた大きき部落で、神社として、城御山神社を祭り、ここより春神・城神をめぐつて明治末年以來、前に述べたように多くの人々によつて土館・雄勝城跡説が唱えられてきた。

ここ二・三部落は鳥海山塊を西に背負い、前面東側には雄物川の二支流、西馬音内川と皆瀬川が合流して、ひかえて併流してい。両者ともに蛇行曲流の多い川で、丘陵麓沿いには、以前の川の流れをものかたず直進の改丁堰原が各所に見らる。

南面地区は城神通りの南、郡山部落との中間の木田で上流から流出して來た土壤の堆積によつて形成された。ここは泥炭層である。特に城神通り地区は二回にわかつて発掘調査をした。三十六年十一月は明治末年長井氏の發掘した地盤の隣接地域——冲積台地の發掘に連なる泥炭を發掘した。

三十七年五月には瀧原の上段—沖積台地上を調査して(1)。また三十八年夏に調査して(2)ひばり野邊跡は、城神地区から西に約千メートルを洪積台地上にある。東側は段丘で沖積台地（城神廻）に続いている。北から西側にかけては切り立つた山崖となつてゐる。南側は緩やかに傾斜した丘陵になり、全株として正三角形の一区割をなしてゐる。中央に瀧原地をいただき、周囲の丘陵には土器片が散在して遺跡の存在をかけつてゐる。

四、堀 墓 調 査

三十六年の発掘調査は、(1)南田地区の水田二十アール余りの範囲と、(2)城神廻りの瀧原地で行なわれた。(3)更に新たに発見された新成中学校グランド内遺跡（ひばり野邊跡と後神）も予備的調査を行なった。

三十七年の発掘調査は、(1)ひばり野邊跡の土坑列と、昨年の城神廻り遺跡の調査の結果から沖積台地上に住居跡を仮定、調査結果は「柱基跡」一基を確認することが出来た。

三十八年の調査はひばり野地区に発見された土坑列（柱穴列）を主眼とした。

調査は(1)土坑列の範囲を認ること、(2)この土坑列、即ち柵列内における建築跡や施設の有無を調査すること、(3)地形図を作成すること、の三点に重点をおいた。調査の結果は東側の柵列と東側北端の隅を確認した。柵は更に南に延長して行くが、その状態は丘陵々縁にそつてゐるのが東側南端で確認出来た。

（昭和三十六年慶登掘調査）（四版第二回参考）

ここは昭和初葉時に整理中に木材を出土したと云われている。これは明治末年に東論誌でいたる終城跡に聞きして、松田耕詩の書本を見たときに引用。城柵の一部を見て雄勝城跡研究に新たな資料を得たものであつた。

調査に先立ち耕作者の高橋見義氏から現地で、発見當時の説明があり、氏の記憶する地點を中心にして赤色粘質土層となる。埋木の痕跡もその他の遺物しまつたく発見することが出来なかつた。

かつて埋木が発見されてから三十多年、毎年、鶴や鳩におかれて消滅したものと認める。後に埋木があつたとしても開田以前から一草が海水に見舞われているため流木の場合もあり得る。

以上当地区から今のところ遺跡を示す資料は見らるず、生活跡と推察出来る何ものも発見できなかつた。

(ロ) 城跡回り地区

当遺跡は、これもすでに前述したように、その地名から長井金鳳氏が寶物收集のため登場を実施し、多量の土器を発見したところである。その大多数は失なわれたといわれていたが柿崎氏により新成小学校に所蔵していたものがあることが判明した。この土器のうち多數の土器に墨書き銘が残され、當時から識者の間では重要な資料としては目されていた。長井氏は登場の際の出土状態、出土遺物などについて、書き残していないため、たゞ土器の出土を知るにすぎない。

三十六寺の調査は遺跡と出土品の関係と言う大きな問題を解明するための予備的なもので、登場の長井氏の登場したと伝えられる湯水泉の隣接区域に二ヶ所に六寸のトレンチを設置して調査した。

地表下四十五cmまでは褐色有機質の表土で遺物は含まれていない。この表土の下に厚さ二十cmから六十cmにもおよぶ泥炭層があり、主としてマコモによつてつくりあつてある。

遺物の出土状態は、発掘地島が冲積台地の段丘斜面の麓のため台地上から流水落ち、更に海水のた

め壊乱された筒木などと雜多に散在している。だから遺跡としても良好とは言をなす。

遺物は泥炭層の上部に包覆され、多くの植物種子をも検出することが出来た。泥炭層の下は苔炭色粘土となり、今回の調査から異原地感での遺構の発見はさかめて困難な状態であった。一方土器の埋蔵状態及び木器等の出土状況から当地上に生苗跡の存在を推測することが出来た。

出土品（図版第三図・図版第四図参照）

人工の土器・木器類と自然遺物の植物種子に大別される。

(1) 土器

土器は須恵器が大半を占める。器形は平形が多く十七点を数える。他に一馬の竪形土器がある。なお片形土器のうち五点に墨書きを検出することが出来た。記銘の判読出来たのは次の三点「赤麻呂」、「拂」、「川」。このうち「赤麻呂」は長井氏が発掘して新成小学校に残された分にも一馬ある。このような墨書き土器は言うまでもなく土器器面に墨書きをしていて、記銘は人名・用途名・使用官署名・吉祥句やその他の記号となつて、時に使用官署・御署名はその遺跡を知る重要な資料となる。

本県で墨書き土器が多量に出土しているのは、社田市寺内・秋田城跡及び下新城丸山城・男辰市船本飯ノ森

仙北郡仙南村高梨

いわゆる松田城跡・平鹿郡雄物川町石塚、と今回調査した城神地区に限られる。

木片一馬・曲物底部一馬と遺跡が泥炭層中にあるため、植物質の遺物を見ることが出来たが、保存状態は良くない。

(2) 植物種子（第一図参照）

カヤ トチ クルミ テモ スモモ

などて、こねらで見された植物種子は食用植物である。カヤの実が一番多い。しかしこの程度の食用植物の遺存では、当時の食生活の全貌を知ることは出来ない。なおクルミとスモモは花か葉茎によつて食された痕跡を残している。

第一回 昭和三十一年度調査、城神通り邊跡、泥炭層出土、植物種
(モミジ、トチ外核 2クルミ 三至モ 4.スモモ リカヤの実)

昭和三十七年度登堀調査

(図版第二回、第九回参照)

第三回(写真) 発見当初の土塁列

(ハ) ひばり野遺跡(新成中学校グラウンド)

発見は、三十六年の城神通り調査中グランド施設工事者による。工事によつて既にその痕跡をとどめない土塁もだいぶあるが、現存している確實なもの十三基、内十基は約六mから八m間隔で北北東の方向に一列に並ぶ。なお、図中土塁20・19は不確実ながら痕跡と推定されるものと残している。図中14・16・17・18の四塁は前着柱列に付いてのような関係のものか不明である。以上三十六年度調査による。

三十七年度はほぼ直線上にあると考える土塁の南への延長でみたの登堀調査は土塁より南側未整地のグラウンド予定地に隣接する地島まで、土塁列の方向に合わせて、長さ三十二m、巾三・三五mのトレンチを設えし整堀作業を開始した。

黒色表土は、ほぼ三十cmから四十cmで昭和二十一年度土塁跡を確認した粘土層に達する。
この深度で精査したが南方向隕上にその延長を確認することは出来なかつた。更に除土作業を行つて(?)忠魂碑前をボーリングした結果、土塁十六・二十一・二十二を隔ぶ縫が立ちそられる。
それにより土塁二・十五・十六・二十一を隔ぶ縫が立ちそられる。

また附近を踏査した結果によるとこの台地の西一〇〇m程の地盤に湧水があり沼泥地となり、それきとりまく丘陵の斜面には窓跡が上部には住居跡でもあるのか沢山の土師器片の散布をみると出た。この地にはとりあえず測図調査を要するものと観察された。

(二) (三) 城神廻リ遺跡

調査は台地上に中一・五尺長さ約三十尺のトレンチを七個の間隔で設定。それぞれのトレンチを二区に分け、北側西寄りをA-1、同じく東寄りをA-2、南側西寄りをB-1、同じく東寄りをB-2とし、更にA-1とB-1を結ぶトレンチをC、A-2とB-2を結ぶトレンチをDとして、それぞれの地区で作業が進められた。

地層位は全般的にみて約二十cm前後の耕土で、層中土師、須恵器の中破片が含有され、この層の下十五cm前後は褐色土となり、本章的古遺物包含層とすつてある。以下黄褐色土となり遺物は認められなかつた。この上層部に遺物が認められる。(図版第五四参考)

Aトレンチ、ニカ所に窓跡と多數の柱穴を見出した。

ニカ所のカマドのうち、北側A-1トレンチ、中央発見のものは長径二・六m、短径一m、焼土高二十四、中央西寄りに二個の石を配して焚口としている。使用した二個の石は、長さ六十cm、径十六cmの鉄鎌状の川原石を二分していた。また、こら鉄製鎌の破片が登見されている。

窓跡付近に散在する柱穴は、その規模や断面に全く統一を欠いていた。(図版第五四)

B・C・トレンチ

このトレンチから何箇の遺物も遺物も発見することが出来なかつた。

Dトレンチ

トレンチ中央、住居跡前面に一個の石を配した焼土塊が発見された。これははたして、住居跡に甘

屬する施設かが早急に察されたものか判別出来なかつた。

柱尾跡(図版第七四参考)

柱尾跡はA-2、Dトレンチおよび東北部の拡張によつてその全体を知ることが出来た。住居跡は東西六尺、南北五・二尺の隅丸方形。壁の高さ約三十cm、壁向はそ小それを方柱と合致する。住居跡の前面に二十一個の柱穴が周壁に沿つて置かれているが、南側のだけは壁側にその跡をとどめている。

庫は中央にもかつて全面が次第に周辺より二十㌢程度高くなつてゐる。また表面の處々に芋か蕷で編まれた敷物が炭化して残されていた。ゆは中央にあつて、仕切り施設を持たない。南壁寄りに長さ一・三㍍、巾一㍍、深さ二十㌢の落込みがあつた。内部には焼土が堆積し、簡單な竈が造られていたものと推定される。煙道は見当らない。

東壁から六十㌢離れた壁に平行する巾二十㌢長さ約一・六㍍溝がある。更にその南端に長さ一㍍、幅五十㌢、深さ三十㌢の卵形の貯穀穴があり、中から多量の炭化したモミを出土している。

出土品は土師器、須恵器の中破片を悉く検出した事が出来た。
以上の點から、この住居跡は第一に極度の記憶喪失者が着旱を形を示している。これは菅江真澄によつて書きとどめられた北秋日野内河町から発見された家屋の例に近似している。
更に住居跡の埋没状態は住居跡内から柱穴まで雷打混入粘土塊が充填されてゐる。ことは明らかに人為的暴力で破壊され、埋没がむごろ行われてゐる。恐らく住居跡内から什器の出土しない理由もそこには起因するものと言える。

出土品（陶器等四四件）

須恵器（縦貫）壺一。

須恵器（縦貫）壺一。

土師器壺一。

土師器壺一。

鉢製鏡
形態は内面に、一端を若柄のため折り曲げてあり、鏡として比較的新しいものに屬する。也に炭化した織物及びモミがあり、このモミにはノゲの甘苦がよくみられる。

長方形土器、新成小学校保管の窓書土器をも参考のため曾しておく。

昭和三十八年ひばり野地区（クラシンド内）の発見調査は、前章で登場した土壙列を手がかりとして進めた。その結果、前章で登場した土壙列ナンバー1-2と1の間に新たにナンバー15-16が発見され、さうにナランバードに付けて「アーバン・アーバン・3・4」として所見されたのである。この中で、ナンバー33は後世に想られて、他の土壙のような状態ではなく、ロームのプロックが混入していた。そのため土壙を確定することは出来ないが、ナンバー21-34との關係、また、その近くに土壙らしいものが発見出来なかつたこと等から見て土壙列の一つと見てまちがいはないであろう。

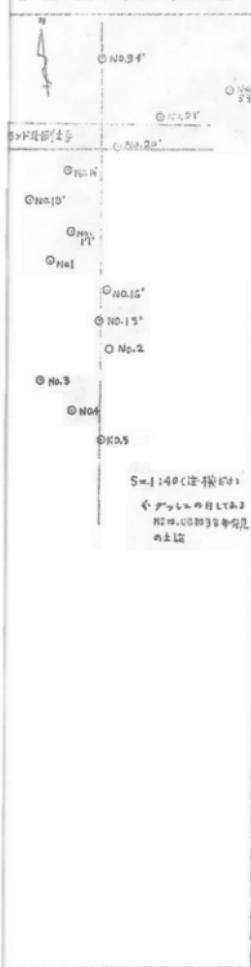
一方、クラシンドの南側にも新しくナンバー22-23-24-27-31の土壙は約一直線になつて丘陵の陸謫を走り、大きさ、厚さに於いても大差ない。しかれど、23-25-26-32の土壙は、特に23-26は深さ30cmしかなく、他の上塙と異る。そして位置に於いてもクラシンド内の土壙の組合とも異なる。他に22の西側に二つの柱坑が発見されている。がこ小らの性格ははつきりせず、今後の調査で明らかにしなければならない。

他にクラシンド内ナンバー1の東側に、今まで登場している土壙より小さいAなる土壙が発見された。これと土壙列との関係を調べるために、Aの東西を精査したが、他に土壙らしいものは発見出来なかつた。（第九回参照）

昭和三十八年度発掘調査
市ひばり野地区（クラシンド内）
(図版第九図、図版第十図参照)

第三回 住居跡（下東上部裏）写真
第四回 京頭付着の炭化した敷物 同
第五回 モミを出土した貯穀坑 同
第六回 クラシンドの土壙列 同

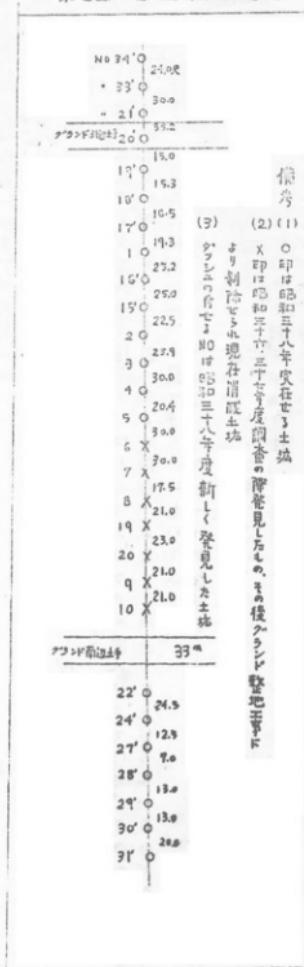
第一圖 土塙の振れ様子の図



(2)

土塙列は正確に一直線上にあるのではなく第八圖のようになくて東西に振れてい

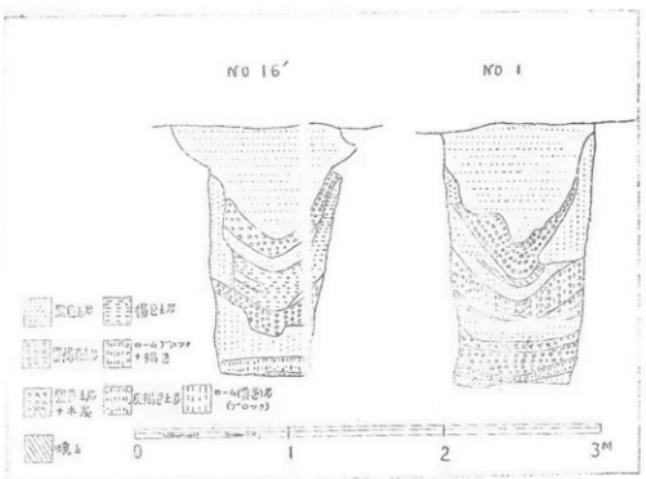
第七圖 各土塙の間隔



信
号
(2) (1)
○印は昭和三十八年冬モ土塙

X印は昭和三十九年冬度調査の際見したもの、その後グランピ
アランド面付

(1)以上の調査の結果を要約する。
土塙相互の間隔(往回尺)は第七圖のように大きいものは三十尺、中等のものは七尺と不整で



第九図 土塚 10.1.2.15' 16' 断面図 (2.15' m)

35 新城川の藤原治政所有のリンゴ畠から、先
36 が二つの土塚らしいものが見つかったことを聞
37 き、八月四日からその附近を調査した。園の
38 ように後藤氏のいう土塚らしいものは既ぐに落
39 て、ホトシン手を設けて登場した。その結果、
40 土塚と同様のものが発見された。うちナンバ
41 13

(3) 土塚の断面図(第九図)でわかるように、この土塚は、水平な場所に作られたものではなく、自然の丘陵の段階を辿りながら繞り回る。これはクラシックの南側の側からもはつきり見える。(4) 断面間に明暗さっているようにその深さは約1m程度(茶色の部分だけ)で、一、六m計る。この上に黒色土層があるわけだから、その全体の深さは約二m計算すると思われる。(5) 土塚のボリュームは、(イ) 圆形(最も多く)、(ハ) 長方形(ナンバー3・4等)、(ハ) 四形に柄のついたようなもの(ナンバー15・16)、(ミ) 三日月形(ナンバー17)のもの)と三種類ある。

以下圖版第十一圖によつて説明していく。但し、ピットの大きさ、等さは第十圖に記してあるから略す。

(1) イリホまでのトレンチの中に發見された小さなピットは、ナンバー35、36と號り、ピットの中につまつてゐる土は全で褐色を呈していた。

(2) ハとニのトレンチに發見されたものは、ハブルも後世に作られたものである。(巾の細い溝は後藤謙治氏が掘ったとのこと)。

(3) ナンバー35は、グラント内にナンバー1から三ニニ四討するト・トレンチの中で圓のようほんの少してあるが、段のつくことがわかつた。

前記したようにナンバー35、36は、グラント内に発見されていふ土地と全く同様であり、グラント内の延長と思われ、この場所は、所謂外構の東北のコーナーと推定される。その他の山さるピットは、今のところ建物のあとと思われるが、全面發掘することが出来ず、その性格をつかむことは出来ない。

岩城第一区(圖版第十二圖参照)

岩城堤の北に位置する丘陵を岩城と言ひ、耕作中に多數の土器片を出土している。主に大型的遺物跡埋蔵の可能性を認り、三個所にわたり發掘調査を行なう。

遺物は平行東西に發達した丘陵上に一個所(岩城第一区)と先端部古谷部に一個所(岩城第二区)更に隣接する丘陵に一個所(岩城第三区)と調査区域を定める。

岩城第一区

丘陵尾根から北斜面に向つてトレンチを設立調査の結果、丘陵尾根自述にV字溝状の落込みを認め、その延長を確認するためトレンチ、又はピット掘り等により探査したが、その延長を確めることができなかつた。他に遺構は認められなかつた。

岩城第一区

第十圖

No.	長径	短径	深さ
1	31cm	16cm	95cm
2	17	17	50
3	25	17	70
4	25	18	20
5	19	18	50
6	25	15	35
7	40	30	62
8	50	35	78
9	60	40	64
10	38	30	25
11	50	38	55
12	60	35	25
13	31	25	31
14	50	31	30

出土の口ひきわめて少く、若干の土師器片が出土したのみである。

岩城 第二区（國版第十二圖・國版第十三圖參照）

前記第一区から三に約八十尺はそれが丘陵先端部に東西南北両縁に沿つた十字形のトレンチを設定調査の結果、南北縁には主軸線とつて「」字形の窓跡（土師）すらは空跡と推定され、施設を確認するこゝが出来た。フランは長径二尺、短径一・三尺の横円形を呈し、主軸南側に煙道巾〇・二尺、長さ〇・四尺の煙出しを設けている。現存する内部は赤く焼り、所々に泥岩フロック、土師器等が散在している。壁は東側にその一部で残してある。天井部は落ちていて、発掘状態からみて天井の高さは〇・二尺より二五尺の粘土で覆つたものと推定された。焚口付近には斜型に成型した石をおいている。左が、更にこの施設を中心にして精査したが、他の遺構は認められない。

岩城 第三区（國版第十二圖・國版第十四圖參照）

第三区の北方約一〇〇mはなれた丘陵の麓で丘陵のふところにいたがれと南面の断斜面で、この斜面は三段の段階に区分されており、調査はそのうち奥行の方へ一段目にトレンチを設定調査に入る。精査の結果二層位にそむき水走第跡を検出することが出来た。第一層（上層）出土の柱穴は径約〇・二尺で十一個が発見され、板橋氏の模式図化によつて正面四十一・五尺・奥行二十尺の走跡跡と推定された。第二層（下層）この層は第一層の下約〇・二尺にあり、径約〇・二五尺～〇・三尺の柱穴六個が発見され、こも板橋氏の模式図化によつて正面約四十三尺、奥行は少くとも十八尺以上の走跡物と推定された。但しこれらの走跡物の柱筋は方角に必ずしも通つていなかい。出土品は一層付近から土師器を若干出土している。

昭和三十六年より開始された羽後町土館地区城神廻り遺跡及び南田遺跡の調査において明治末年に大正初年にさめた長井金風氏の調査地點をつきとめ、同種の墨書き土器を包含層中より複数出し、更に木器、及び当時の食料の残片である、モモ、スモモ、トチ、フルミ、カナの皮等を発見し、これらによつて城神廻りの古はん左台土に生活跡を想定したのである。昭和三十七年の調査においては、この台地上において、二基以上の堅穴群を発見し、その一基を精査すると共に、ひばり野地区的土塁列を実測調査した。

昭和三十一年の調査はこのひばり野地区（クランド地区）に主力を注ぎ、前年度の土塁列の南北両端の延長に努力し、クランドにあらわれた土塁列が、南北に一線をなすが如くであるが多少のふれを以つて續き、鹿物跡でないこと、又、内側とし思われる、土塁の断面圖で明らかのように、その構造は、一、二八六もある。こういう頑丈な獨立式柱脚は外側列とされるべきである。

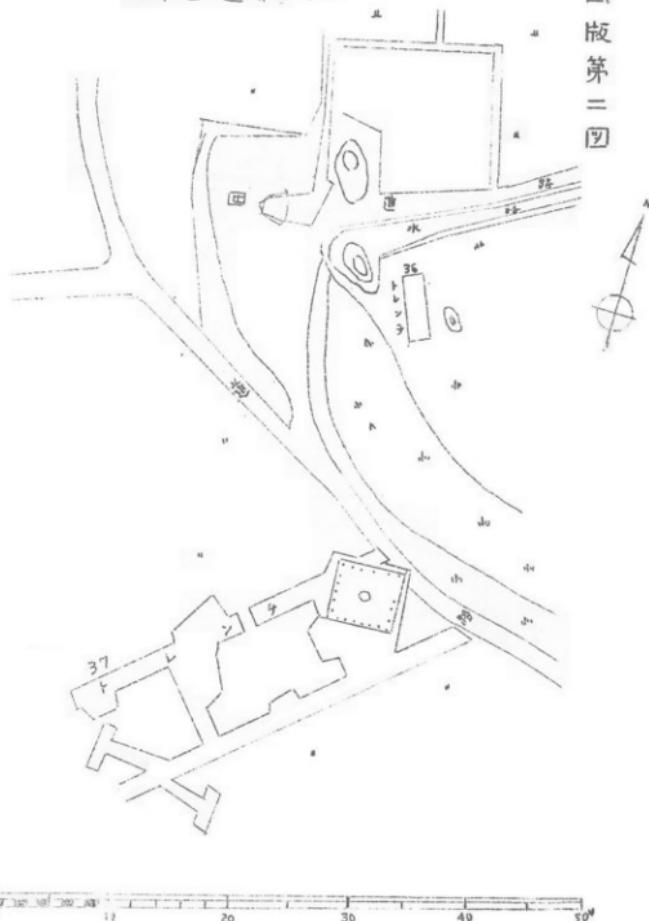
そして、この北の延長は新城川地区的林檜畠中の崖側に達している。南の延長線は今のところ少しつづく土塁を標査中である。そして今のことろ、クランド地区的柱列は方形の構築の東の外側列かと考えられ、新城川地区より西折し岩城地区に向うが如く想像される。もし以上の如く考えられると、西方には岩城沼を引だき、中央に凹地いただき、西側の低湿地に面し東側も高い丘陵に囲まれた標跡の平面が予想される。

現在の段階においてこの遺跡と東方、土館、城神遺跡との関係は論するにいたらないが、井に同期の遺跡を考えられ、又、两者共に雄勝城と関連ある遺跡と考えたい。

図版序一図は五万分の地図(新潟市)に (1) 菊田 (2) 城神廻りの位置を記したが、おもひ 塗り三次城神廻りを標跡登録番号(1614)

四版第二図

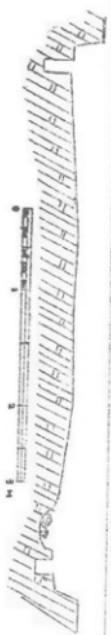
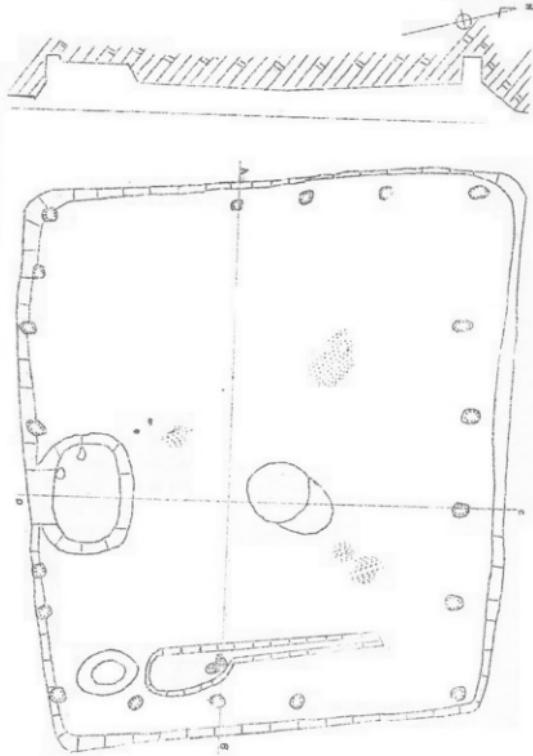
城神廻り遺跡全体図



0 10 20 30 40 50

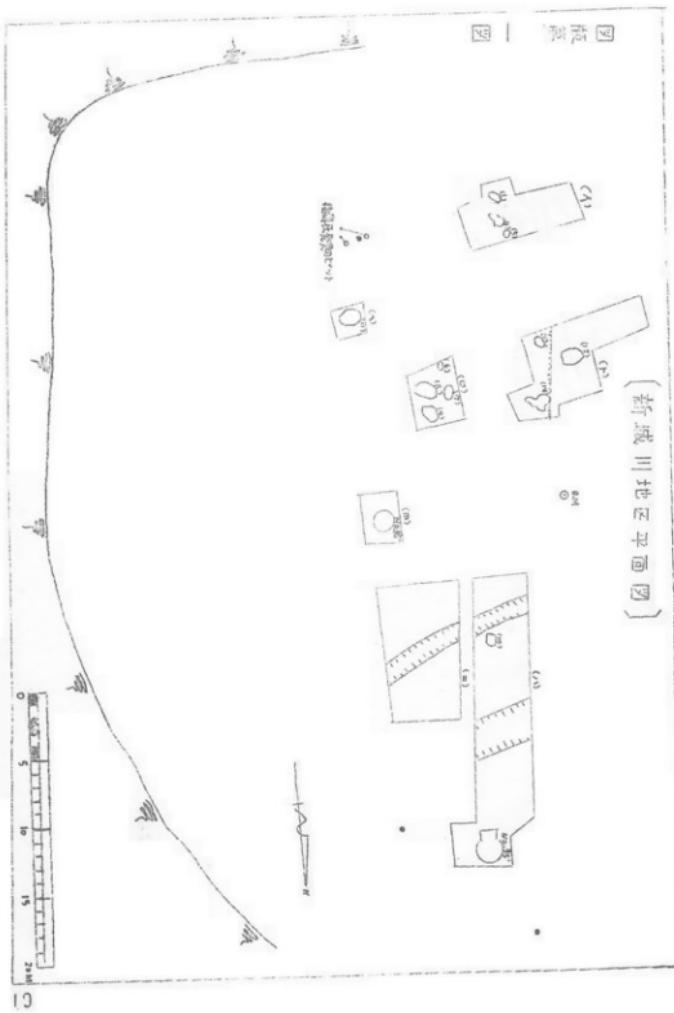
(城の通り 住居跡)

圖版第十七

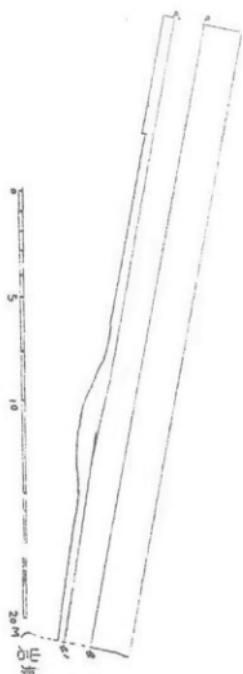
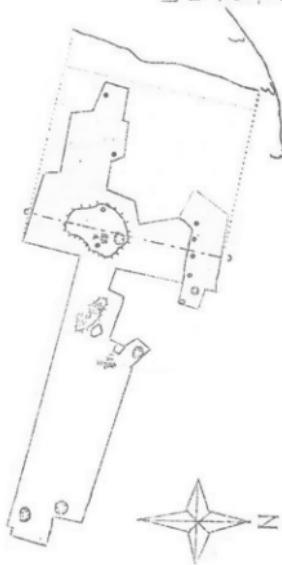


新潟川地区平面図

四



圖版十一
建物



岩城塙の火 砂芯瓦式やかた器

古記図版は略字を省略した。（柿崎）

○版第三圖

城神廻り遺跡出土品

（昭和三〇年度調査）

同 四・同

五・城神廻り△トレンナ竈跡

（同）

（写真三葉）

同 六・同

八・長井金冠氏発掘品

（新成小学校蔵
渡辺辰馬蔵）

九・グラント地区柱穴平面図

（写真三葉）

十・同

十一・岩城地区

（写真三葉）

十二・岩城地区

（写真三葉）

十三・岩城第三区塙跡

あ と が き

第三章次にあたる調査を記録にとどめ、研究者の手がかりとするほか、今後の調査の基礎資料となることは、きわめて重要なことである。特に足田地区の遺跡については、その規模の大きさと内容については、秋田城跡にも比較されるもので、従つて、その発掘調査には相当の困難が伴なつた。しかし、東京大学教授斎藤忠氏、岩手大学教授板橋源氏、秋田県文化財事務局奈良修介氏、豊島郡氏、金足農業高校教諭幸野敏夫氏らがチーフメンバーとなつて県内の考古学者及び羽後町関係者、秋田大学生、県立高生徒の協力のもとに行なわれ、調査のねらいは一応達成した。ただ、これが、この地区的調査の鼎大成ではなく、未知の点については、今後の調査活動に期待いたしたいものである。

昭和三十九年三月

秋田県教育庁社会教育課

文化係長 加賀谷辰雄
社会教育事務官 吉川欽一
主事 佐々木清一
事務官 山口哲

261504